

内山愚童略歴

明治七年五月十七日、新潟県北魚沼郡城川村（小千谷市）、菓子器製造業内山直吉とカズの長男として生れる、幼名を慶吉。

明治二十七年（頃） 上京、井上巴了家の家庭教師となる。

明治三〇年四月、神奈川県愛甲郡小鮎村宝増寺（曹洞宗）で得度。

明治三十一年（三十二年まで）、曹洞宗第一中学校に学ぶ。

明治三十六年四月、箱根大平台林泉寺住職死去にともない、同寺の住職となる。

◎明治三八年 幸徳秋水を知るにいたって無政府主義に共感をよせるようになる。

◎明治四一年六月 赤旗事件 がおこる。九月印刷機を上京の折、購入して「無政府共産」等を作成する。

◎明治四二年、五月二九日国府津駅で逮捕される。

◎明治四二年、十一月横浜地裁で出版法違反で禁固二年、爆発物取締罰則違反として懲役十年（控訴審で懲役五年に訂正）の判決。

明治四三年、十月十八日大逆罪で起訴される。

明治四四年、一月十八日死刑判決を受ける。

同月二五日死刑執行され、午前十一時二三分絶命

享年三八歳

あとがき

種田山頭火の流浪に宗教そのものはわからずとも心のやすらぎと憧憬を抱く人は多い、しかし激しく「世直し」の為に燃えつきた内山愚童に「禅」を見いだそうとする人は少ない。高橋和己の「邪宗門」に主人公千葉潔が戦時下における「禅」のありかたを老師に問いつめるシーンがある。

「生臭坊主！ 悟りすまずな！……あなたがたが悟りすまして禅堂で香をたき、鐘を打っているうちに、この世界でどういうことが行なわれているか、一度でも考えたことがあるのか。殺戮や圧制の本質をつきつめることもなく、命ぜられれば従軍僧を派遣し、死体を前にしてはお経をとなえるだけ。それが仏の大慈悲か！」P二九八

宗教と政治の間に立ち、その双方を認める者が衆生の苦しみを宗教に問いつめるとき、山頭火のように「放下」する者と「世直し」を考えた愚童の間には、ともに「禅」の表面が二面に現われる。

本来、人間の煩悶を癒す筈の宗教倫理が、マルクスのいう「阿片」と化して人々を奈落の底へと導く効果を発することが見受けられる。政治状況の混迷期には、宗教に救済を求める社会風潮が広がり、ブームを生む下地となりうる。敗戦直後の新興宗教、六十年安保前後の親鸞ブーム、七十年前後の禅ブーム、今日のオカルトブームに便上した真言密教など、マスコミに多分に形骸化した喧伝も含めて、その現象といてさしつかえない。しかしそれらは一時的なものであり、深い宗教洞察に致しているものではない。その逆に、真面目な宗教家が、信教の立場より社会の矛盾を告発し、社会変革に信教と同一の自覚を持つことがある。大逆事件に内山のほか、峯尾節堂（臨済宗一無期）佐々木道元（真宗一無期）、大石誠之助、古河力作（キリスト教一とも死刑）、高木顕明（真宗一無期）、そのほか家宅捜査を含めると相当数の宗教者が連座したことがわかる。彼らが全てクロボトキンやバクーニンの影響をうけていたかといえば、必ずしもそうではなく、高木が被差別部落民の壇家と接する過程で社会変革の必要性を自覚したように、宗教者の立場で社会主義者との交遊を持った。教団は禅宗に限ったものではない。しかし真宗が水平社に、日蓮宗が昭和初期の国家社会主義運動に何らかのかたちで影響があったことは言いまでもないが、曹洞宗、臨済宗の禅宗教団は内山、峯尾らの例外を除き、本山末寺にいたるまで体制側でありつづけた。特高警察の弾圧記録、「特高月報」によれば禅宗の反戦の記録は全くない。そのかわり厭戦の記録はいくつか残っている。しかしそれは灯台社の明石順三に加えられた内容ではなく、平和時においてもあきれかえるもので

ある。国家総動員法下「徴用工員として直接ハンマーを握るよりは精神指導をやらせて貰った方がよい」(島根県)「直接作業に従事するより指導教化に当らして貰った方が効果的」あげくは「死んでも戒名をつける坊主がいらい」(福島県)といいたすありさまである。戦争協力はいうにおよばず「衆生」を死地へ追いやることで教団ぐるみの保身を通していたのである。

愚童の処刑後、曹洞宗は宮内大臣、内務大臣に「開教以来常ニ尊皇護国ヲ本義トスル宗門ニ於テ誠ニ恐懼……」という遺憾の意を表わしている。いいかえれば「体制派」を自称した宣言なのである。

かくも執拗に教団と愚童を切り離した資料をあげた理由は、編者自身、教団の醜態を身をもって体験しており、教団の内部から愚童のような僧侶が、再びこの世に出ることは不可能と信じているからである。

自から菩提心を去勢した教団を見捨てて四年忘れかけていた宗教心を、この編集を通じて内山愚童に垣間見をよるな清しい作業であった。これで安心して、〃禅〃の関係を断つことができた。紙面の最後となったが、この作業を勧めて下さった大島英三郎氏、貴重な、「無政府共産」を提供された森長英三郎氏、資料を教示していただいた小松隆二氏、市川白弦氏、厄介な印刷をひきうけていただいた三光印刷の佐野明氏に心より感謝します。

編集後記

▲出来ばえの是非より出来あがった喜びの方が今は大きい。(編集部一同)

△先頃、日本を追放されたヴィクトリア良潤氏が「入獄記念・無政府共産」の原文を持ってアメリカへ帰国したとか、内山のあとを継いだ反戦僧が青い目だったとはかえすがえすも皮肉(市川白弦氏より聞く)

▲幸徳秋水に宛てた内山の手紙がどうしても収録できなかったのは残念。もし見つかれば内山の社会主義に対する関心に今一步立入れたかも、手紙やい。(カ)

▲一千部印刷したと言われる「無政府共産」は官憲の手によって、ほとんど抹殺されて、現存部数は僅かである。それを五〇〇部の世に復刻したのだから内山君、やすらかに！。(カ)

△おいらたちを「狼」のシンパとして捜査している明智君、まちがえた官憲諸君、おれっち「クロ」じゃないヨ、「シロ」です。(カ)

△もう春だ。どうやら無事に芽が出はじめたようである。確実に、無慈悲の寒波を避けて、はね返して。暖かい太陽はほくのものだ。光は暗闇を射し妖怪はかがやきの中へと落ちてしまふ。情け容赦などあるものか。無用のものはこの手で葬りさるのみである。(ス)

内山愚童の名前の由来

内山愚童の名前は「愚堂」と記されている場合があるが、これはまちがいである。

「大日経」によれば因果の道理を知らず現世に惑溺する凡夫をたとえていう、空海の「十住心論」の第二住心に「愚童持齋心」があり、僧名はこの由来による。

―市川白弦氏指摘―

内山愚童―大逆事件のイデオログ一九七六年三月十五日初版発行

著者 内山愚童

発行者 柏木隆法

発行所 蚕の社

土岐市土岐便郵局私書箱二二号

領価(カンパとして) 四百円十郵送料